第２章　酒類の容器の状況

１．酒類及び清涼飲料容器の種類と生産量

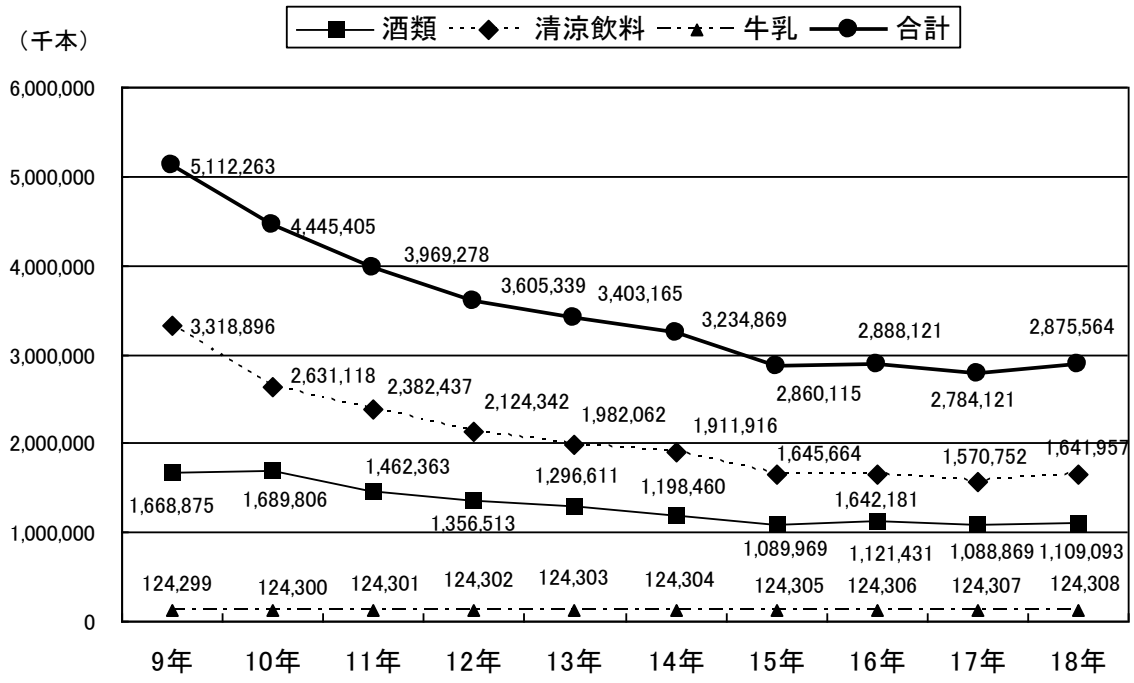
酒類及び清涼飲料の容器には、びん、スチール缶、アルミ缶、ペットボトル、紙パック、樽が主に使われている。まず、容器の種類別に生産量の動向をみてみる。

（１）　飲料用びんの出荷量

飲料用びんの出荷量は、平成 15 年までは減少傾向を示していたが、近年は横ばいに推移しており、平成 18 年は、酒類、清涼飲料、牛乳をあわせた全体で 28 億 7,556 万本となっている。種類別にその推移をみると、酒類、清涼飲料の出荷量が、平成 9 年から平成 15 年にかけて減少しているものの、牛乳については生産量の変動はほとんど見られない。平成 15 年以降は、酒類、清涼飲料ともに、横ばい傾向が続いている（図表 2-1）。

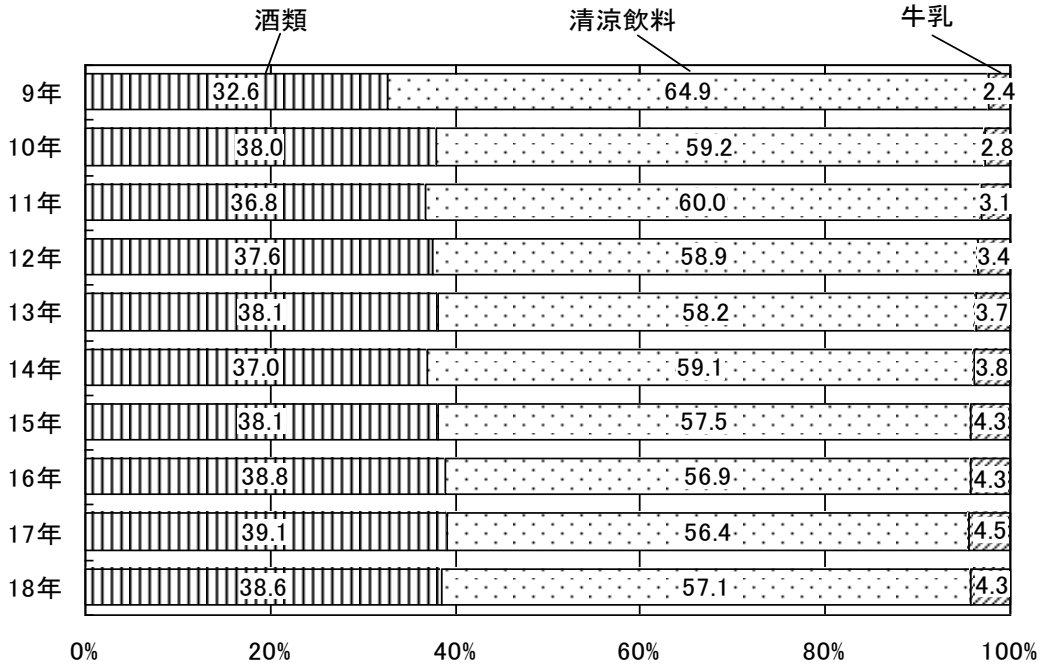
種類別にその構成をみると、平成 18 年は、酒類が 4 割弱（38.6%）、清涼飲料が 6 割弱（57.1%）、牛乳が 4.3%である。酒類、清涼飲料の出荷量が減少しているため牛乳のウェイトがやや高まっているが、平成 10 年以降については、酒類が 4 割弱、清涼飲料が 6 割弱という構成は、おおむね変化していない（図表 2-2）。

図表 2-1　飲料用びんの出荷量の推移



注：平成 18 年は速報値　協会員のみの数値　　出典：日本ガラスびん協会調べ

図表 2-2　飲料用びんの出荷量（構成比）の推移

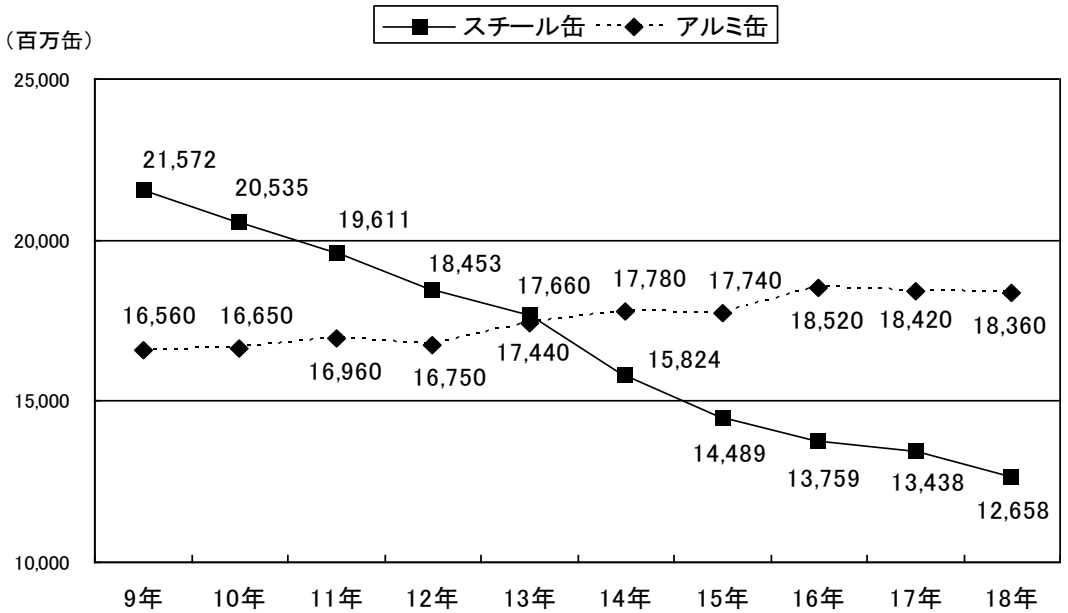


注：平成 18 年は速報値　協会員のみの数値　　出典：日本ガラスびん協会調べ

（２）　飲料用スチール缶の生産及び飲料用アルミ缶の消費の動向

データが生産（スチール缶）と消費（アルミ缶）ではあるが、飲料用スチール缶の生産は減少傾向に推移しているのに対し、飲料用アルミ缶の消費は近年ではやや減少しているものの、増加傾向に推移している（図表 2-3）。

図表 2-3　飲料用スチール缶の生産及び飲料用アルミ缶の消費の動向



注：飲料用スチール缶は生産缶数、飲料用アルミ缶は消費缶数

出典：スチール缶リサイクル協会調査推定数、アルミ缶リサイクル協会

酒類と清涼飲料のスチール缶とアルミ缶の使用割合をみると、酒類はアルミ缶がほぼ100%であるが、清涼飲料はスチール缶が 80%、アルミ缶は 20%という割合である（図表 2-4)。

図表 2-4　酒類と清涼飲料のスチール缶とアルミ缶の使用割合

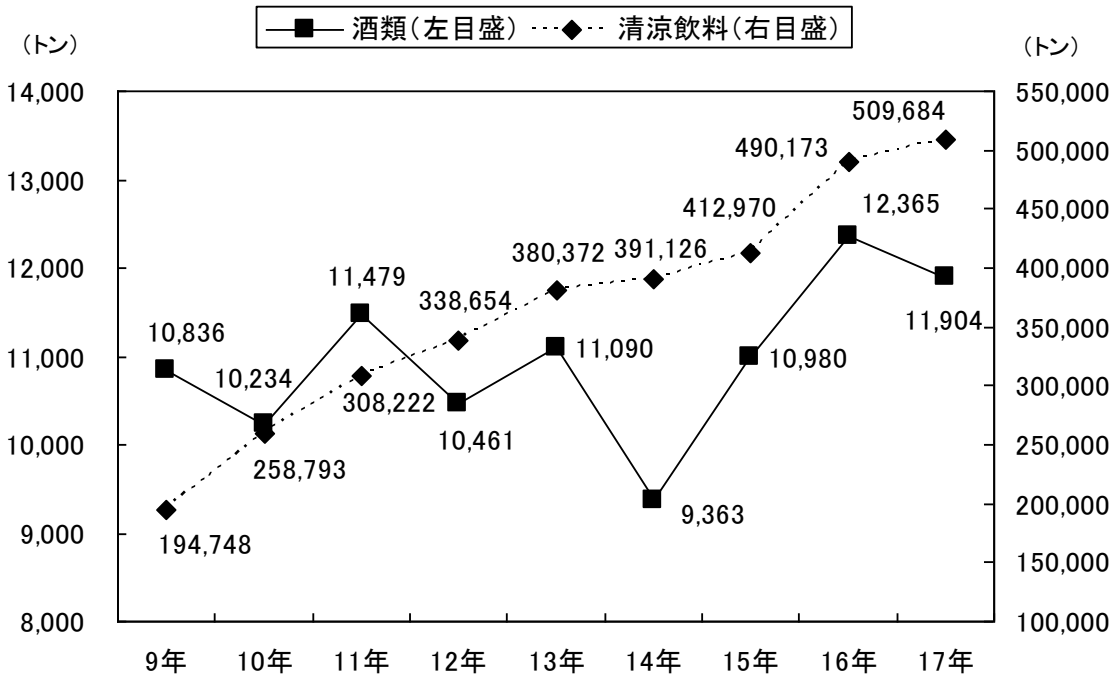
	スチール缶	アルミ缶
酒　　類	一部、使用している場合もある	ほぼ 100%
清涼飲料	80%	20%

出典：スチール缶リサイクル協会（平成 19 年）

（３）　ペットボトルの生産量

酒類用のペットボトルの生産量は、清涼飲料の約 40 分の 1 程度と少なく、平成 17 年で約 1 万 2,000 トンである。その生産量は年によって変動がみられるが、全体としては増加傾向を示しているとみられる。なお、清涼飲料用のペットボトルの生産量は、年々、着実に増加しており、平成 17 年で約 51 万トンとなっている（図表 2-5)。

図表 2-5　ペットボトルの生産量



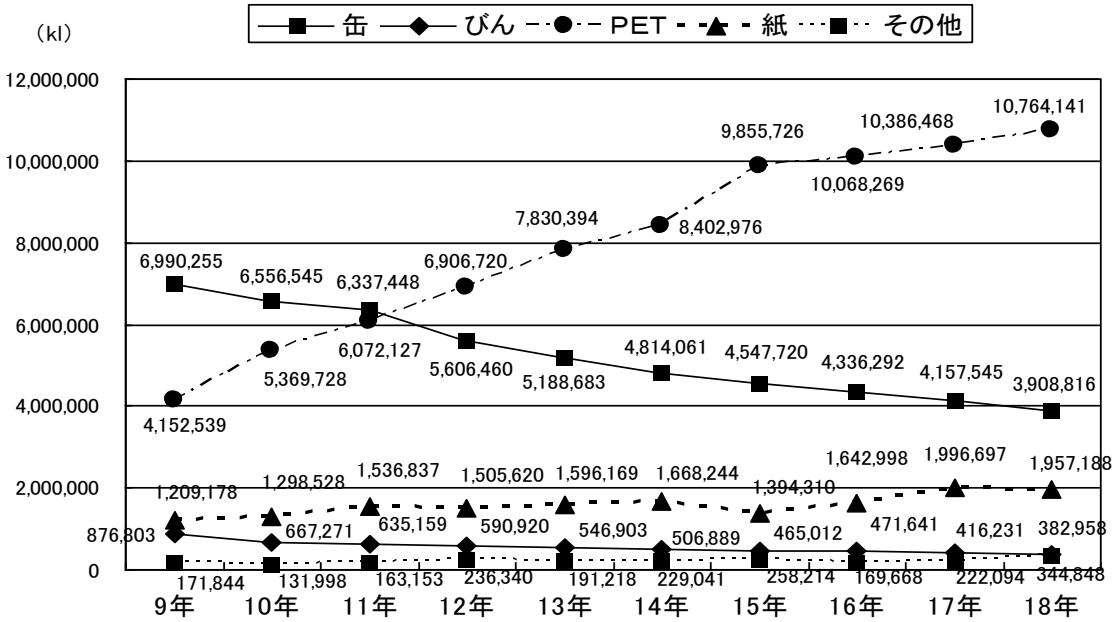
出典：ＰＥＴボトルリサイクル推進協議会資料

（４） 清涼飲料の容器別生産量の推移

清涼飲料の生産量は、ペットボトルが大きく増加しているのに対し、缶は減少している。また、紙は緩やかながら増加、びんは減少傾向となっている（図表 2-6）。

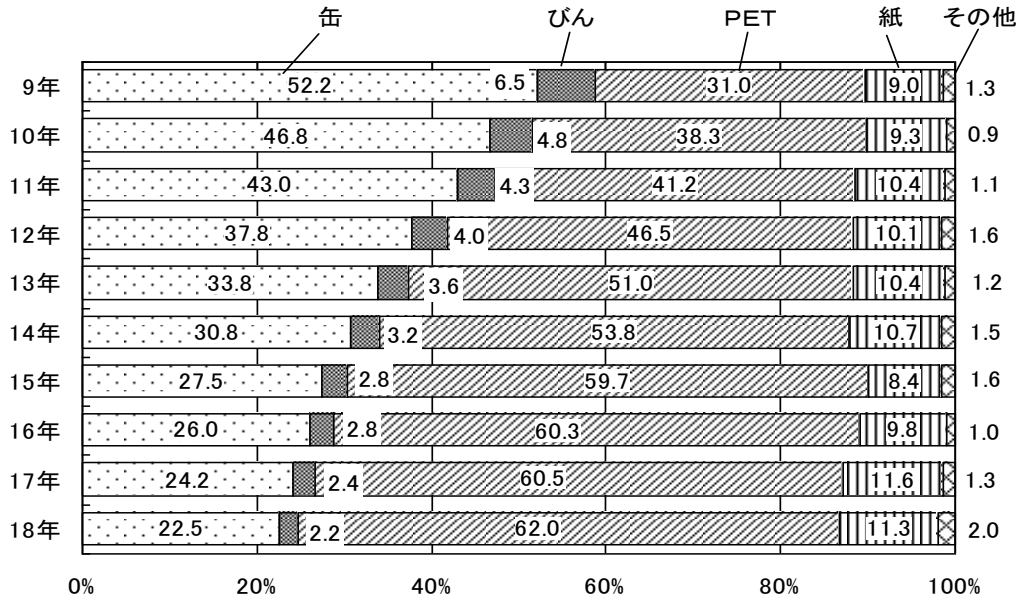
平成 18 年では、ペットボトルが約 6 割（62.0%）、缶が約 2 割（22.5%）、紙が約 1 割（11.3%）を占め、びんはわずか 2.2%である（図表 2-7）。

図表 2-6　清涼飲料の容器別生産量の推移



出典：清涼飲料関係統計資料（社団法人全国清涼飲料工業会・財団法人日本炭酸飲料検査協会 2002 年５月）、財団法人日本炭酸飲料検査協会ホームページ

図表 2-7　清涼飲料の容器別生産量（構成比）の推移

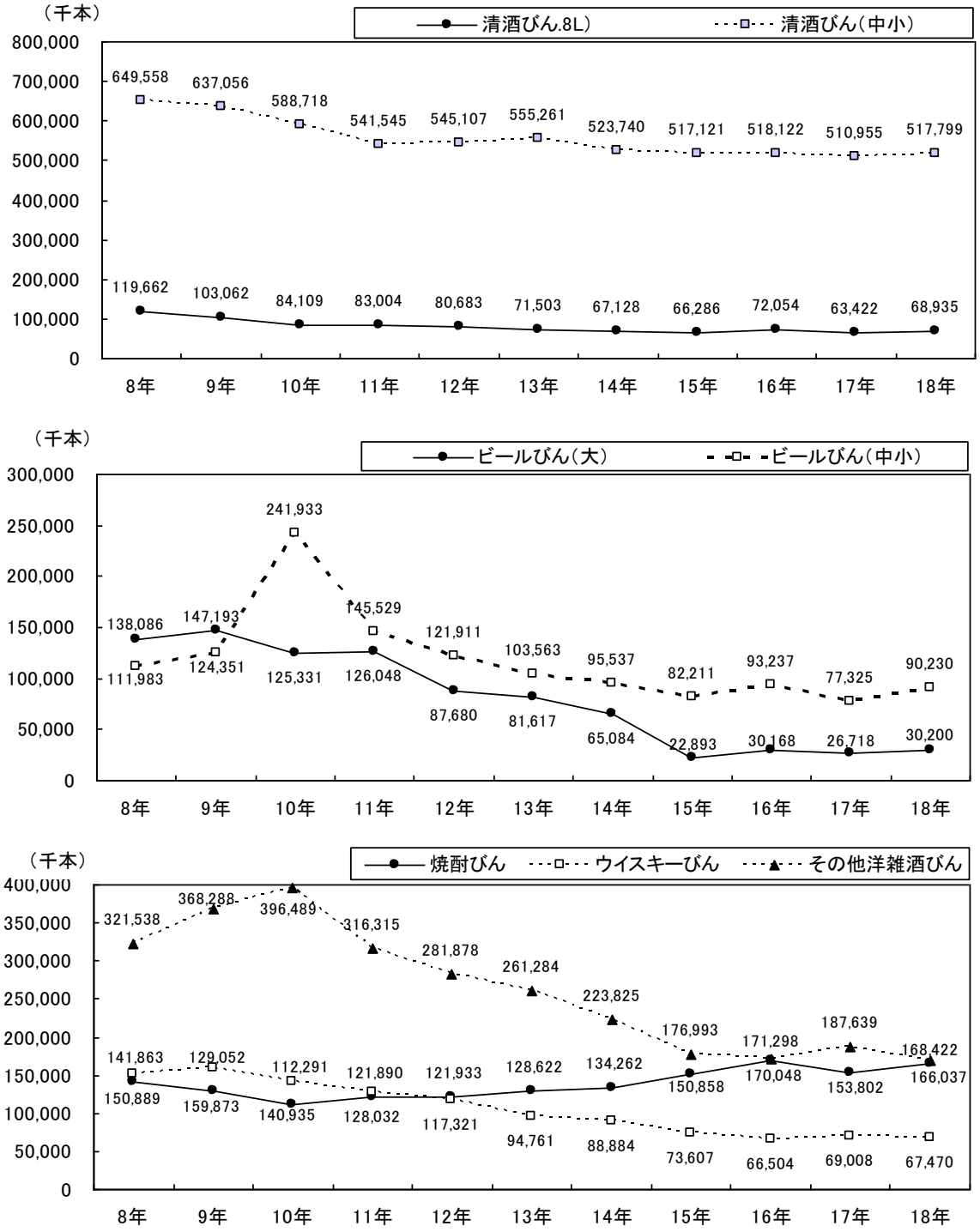


出典：図表 2-6 と同じ

（５） 酒類別びん（新びん）出荷量の推移

最も出荷量が多いのは清酒びん（中小）であるが、平成 11 年まで減少し、それ以降はほぼ横ばいで推移している。ビールびんは、大びんが平成 8 年以降減少し続けており、平成 18 年には当時の約 4 分の 1 まで落ち込んでいる。中小びんは平成 10 年をピークにその後減少し、近年はほぼ横ばいに推移している。焼酎びんは平成 11 年以降、緩やかに増加しており、その他洋雑酒びんも平成 10 年をピークに減少が続いている。(図表 2-8)。

図表 2-8　酒類別びん出荷量の推移

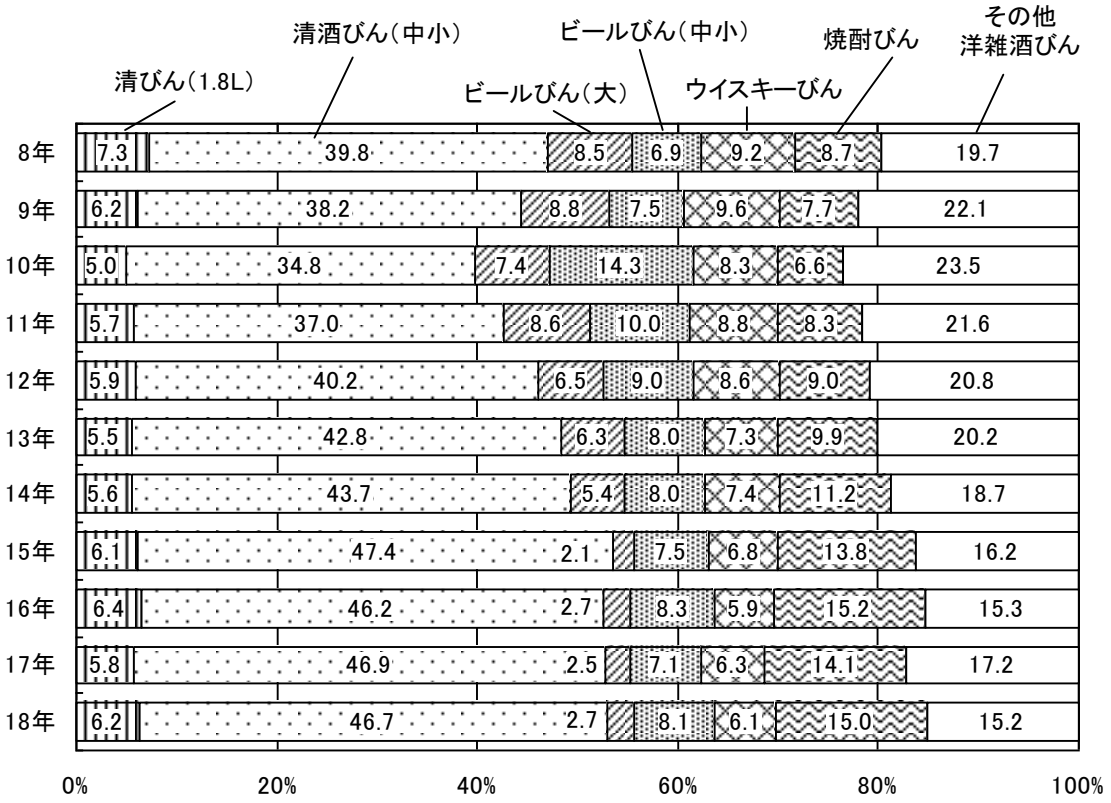


注：平成 18 年は速報値　協会員のみの数値　　出典：日本ガラスびん協会調べ

平成 18 年における酒類別びん（新びん）出荷量の構成比をみると、清酒びん（中小）が半数弱(46.7%)を占め最も多く、以下、その他洋雑酒びん(15.2%)、焼酎びん(15.0%)、ビールびん（中小）(8.1%)、清酒びん（1.8L）(6.2%)、ウイスキーびん（6.1%)、ビールびん（大）(2.7%）の順である。

なお、清酒びん（中小)、焼酎びんについては、ウェイトが高まる傾向にある（図表 2-9)。

図表 2-9　酒類別びん出荷量（構成比）の推移



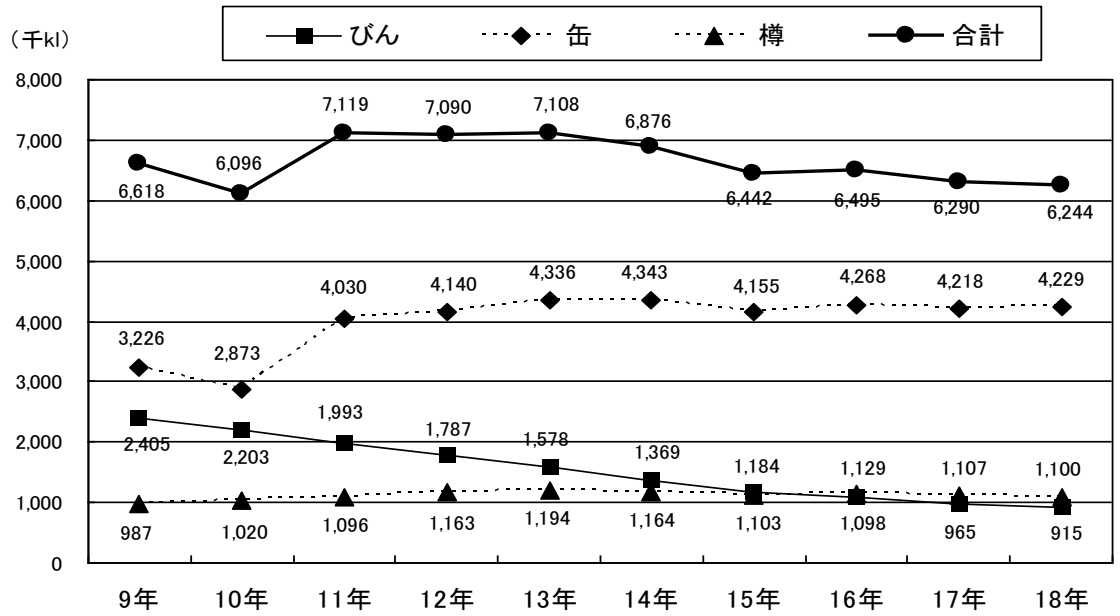
注：平成 18 年は速報値　協会員のみの数値　　出典：日本ガラスびん協会調べ

（６）　ビールの容器別出荷量の推移

ビールの容器別出荷量をみると、最も多いのが缶であり、平成 11 年以降、400 万 kl をやや超えるあたりで横ばいに推移している。びんについては減少傾向にある（図表 2-10)。

ビールの容器別出荷量の構成をみると、平成 18 年で、缶が 7 割弱（67.7%)、樽が 2 割弱（17.6%)、びんが 1 割強（14.7%）である。缶のウェイトが高まる一方、びんのウェイトが低下している（図表 2-11)。

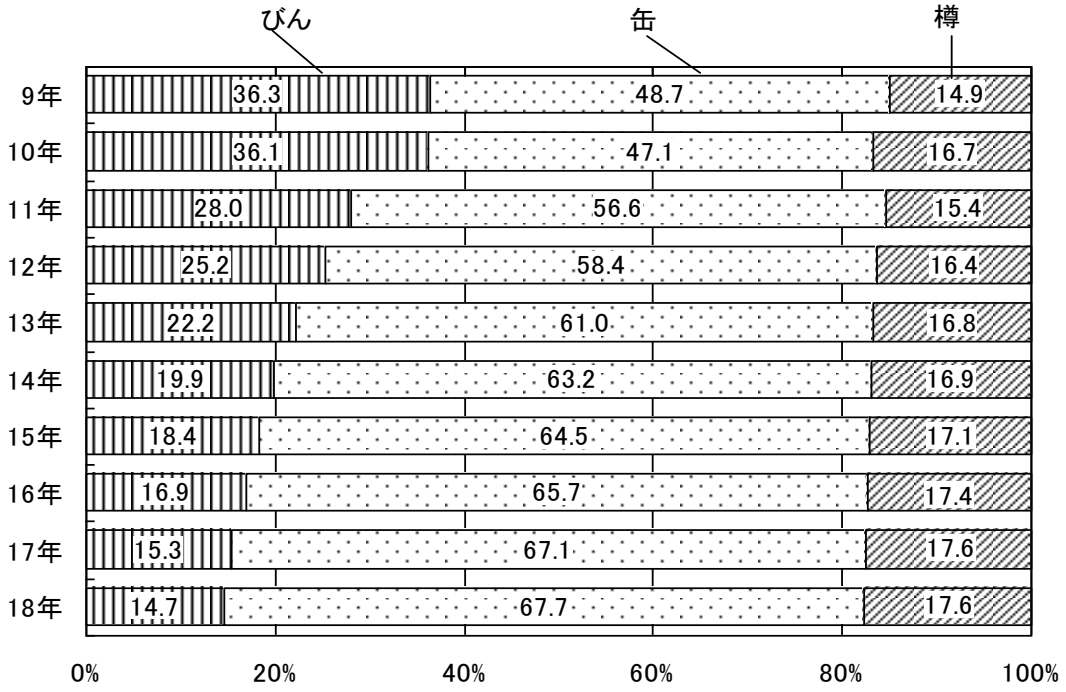
図表 2-10　ビールの容器別出荷量の推移



注：平成 9 年及び 10 年はビールのみ、平成 11 年以降はビール＋発泡酒、平成 16 年以降は新ジャンルを含む。びんは大びん、中びん、小びん等の合計、缶は 350ml、500ml 等の合計。

出典：(株) 日刊経済通信社調べ

図表 2-11　ビールの容器別出荷量（構成比）の推移

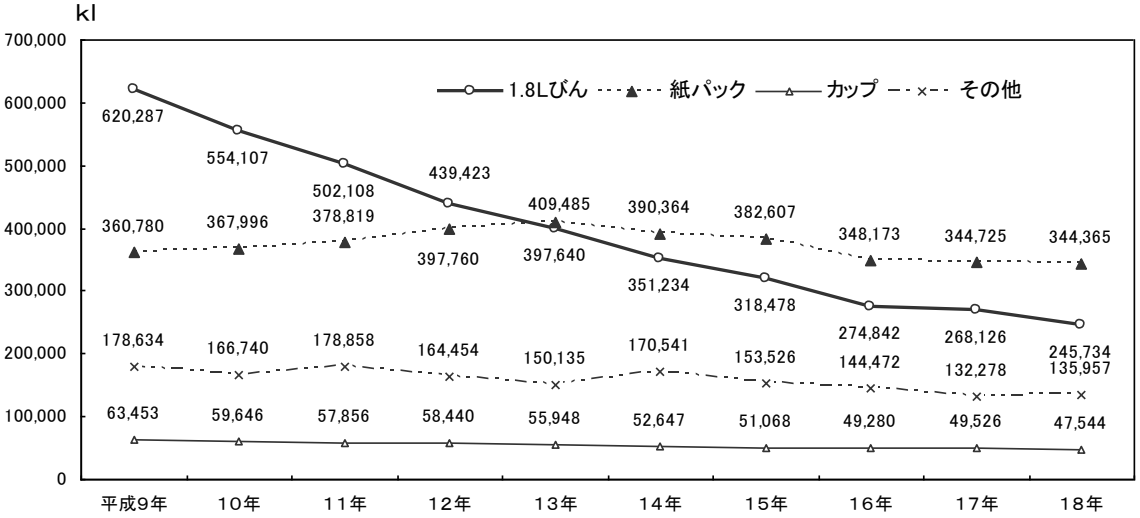


注：出典は図表 2-10 と同じ

（７） 清酒の容器別出荷量の推移

清酒の容器別シェアは、平成 9 年時、1.8L びんが 50.7%、紙パックが 29.5%と、この 2 種類の容器でほぼ 8 割を占めていた。その後、1.8L びん入清酒の出荷量は年々減少を続け、平成 18 年には 31.8%に減少している。一方、紙パック入り清酒の出荷量は、この 10 年ほぼ横ばいに推移しているが、清酒全体の出荷量が減少しているため、そのシェアは 44.5%強に拡大しており、1.8L びんと紙パックのシェアは平成 9 年時と逆転している（図表 2-12）。

図表 2-12　清酒の容器別出荷量の推移



出典：国税庁調、㈱日刊経済通信社「酒類食品産業の生産販売シェア平成 18 年度」版（2006.11）資料から推計

注１：「その他」には、びん 900ml、500ml 等びんと若干の樽等が含まれる。

注２：「その他」の生産量は、清酒（合成清酒含む。）の生産量から、1.8L びん、紙パック、カップの生産量を引いた値とした。

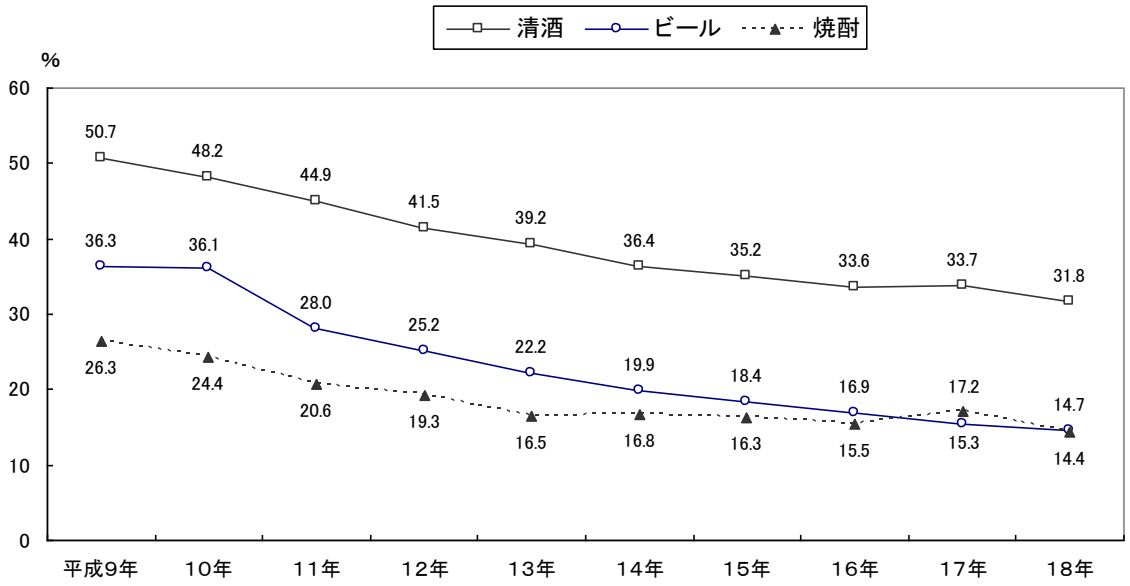
２．酒類業界におけるリターナブルびんの利用状況

酒類業界においては、従来から清酒・焼酎業界で 1.8L びんが、ビール業界ではビールびんが繰り返し使われてきた。近年、清酒・焼酎業界では、1.8L びん以外にＲマークを付した中小のリターナブルびんが投入されている。

図表 2-13、図表 2-14 は、清酒、焼酎それぞれの出荷量に占める、1.8L びん入り商品のシェアを、ビールはびん入り商品のシェアを示したものである。清酒と焼酎は、1.8L びん入り商品の出荷本数に、それぞれ 1.8L を乗じて 1.8L びん入り商品の出荷量を推計し、その数値を清酒、焼酎の出荷量で割って 1.8L びんのシェアを算出した。清酒の 1.8L びん（＝リターナブルびん）入り商品のシェアは平成 18 年で 31.8%となっており、この 10 年間に約 2 割下がっている。ビールのびん入り商品のシェアは、平成 18 年で 14.7%であり、10 年前のシェアの 5 割弱に落ち込んでいる。焼酎の 1.8L びん（＝リターナブルびん）入り商品のシェアは、平成 18 年で 14.4%となっており、10 年前に比べ約 12%落ち込んでいる。

これらの状況から、清酒、ビール、焼酎ともに、リターナブルびんのシェアは減少を続けていると言える。ただし、この中にはデータが公表されていない 900ml、500ml、300ml 容量のリターナブルびんが除外されており、これらを加えれば、若干シェアはふくらむものと考えられる。

図表 2-13　清酒、ビール、焼酎の出荷量から推計したリターナブルびんシェアの推移



図表 2-14　清酒、ビール、焼酎の出荷量と 1.8L びん入り各酒の出荷本数の推移

		平成9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年
清酒	清酒（合成清酒含む。）出荷量（kl）	1,223,154	1,148,488	1,117,641	1,060,077	1,013,208	964,786	905,679	816,767	794,655	773,600
	1．8Lびん入り清酒の出荷本数（千本）（注1）	344,604	307,837	278,949	244,124	220,911	195,130	176,932	152,690	148,959	136,519
	1．8Lびん入り清酒の出荷量（kl）（注2）	620,287	554,107	502,108	439,423	397,640	351,234	318,478	274,842	268,126	245,734
	1.8Lびんの占める割合（%）（注3）	50.7	48.2	44.9	41.5	39.2	36.4	35.2	33.6	33.7	31.8
ビール	ビール出荷量（千kl）	6,618	6,096	7,119	7,089	7,108	6,877	6,442	6,494	6,290	6,244
	びん出荷量（千kl）	2,405	2,203	1,993	1,787	1,578	1,369	1,184	1,098	965	915
	びんの占める割合（%）（注4）	36.3	36.1	28.0	25.2	22.2	19.9	18.4	16.9	15.3	14.7
焼酎	焼酎（甲種・乙種合算）出荷量（kl）	705,006	687,712	704,496	721,483	776,067	798,245	899,700	963,897	963,568	951,900
	1．8Lびん入り焼酎の出荷本数（千本）（注1）	103,111	93,101	80,785	77,429	71,217	74,401	81,342	83,096	92,077	76,263
	1．8Lびん入り焼酎の出荷量（kl）（注2）	185,600	167,582	145,413	139,372	128,191	133,922	146,416	149,573	165,739	137,273
	1.8Lびんの占める割合（%）（注3）	26.3	24.4	20.6	19.3	16.5	16.8	16.3	15.5	17.2	14.4

注1：清酒、焼酎ともに1.8Lびんに中身が入ったものの出荷量（資料：1.8L壜再利用事業者協会）
注2：清酒、焼酎ともに注1の中身を（社）日本リサーチ総合研究所が算出した。
注3：清酒、焼酎ともに、それぞれの出荷量に占める注2の割合
注4：ビールの容器はびん以外に、缶、樽がある。

３．使用量の変化要因と今後の利用動向

わが国では、主にビールびん、一升びん、牛乳びん、清涼飲料用びん等のガラスびんのリターナブルシステムが構築されてきた歴史がある。しかし、少子高齢化、女性の社会進出といった社会情勢の変化に伴い、買い物時に軽くて扱いやすい、また、販売店へ返却しないで済む缶、ペットボトル、紙パック等の容器を選ぶ傾向が強まり、ガラスびん全体の使用量は減少し続けている。

例えば、リターナブルびんで販売されていた清涼飲料は、自動販売機の普及が進み、小売店がコンビニエンスストアへと代わった結果として、現在の主流は缶やペットボトルである。酒類についても、酒販免許の緩和によって、ほとんどのスーパーマーケットやコンビニエンスストアで販売できるようになり、ワンウェイ容器を扱う販売店が増加している。これらの流通システムの変化に伴って、リターナブルびんの使用量も減少傾向にある。

また、平成 9 年の容器包装リサイクル法の施行を契機に、ガラスびんのリユースの減少や他素材容器への移行が一気に加速したという指摘もある。その理由としては、消費者が選ばなくなったことに加え、回収システムにかかるコスト等が事業者の負担になっていることが考えられる。

地球温暖化や廃棄物処理など環境に対する関心が高まっている中で、減少傾向にあるリターナブルびんが他の容器と比較して環境負荷が少ない、環境にやさしい容器として、これまで以上に認知され、利用されるためには、様々な方面での課題を検討しなければならない。